

シリーズ ひと

「こたつに座っていても柔道をしていても同じ一日。生きがいのある人生はすばらしいことです」

なかじま ただし
中島 忠さん

上野田在住、67歳。日本マスターズ柔道協会常務理事(埼玉県担当)。6月18日～6月23日にブラジル、サンパウロで開催された柔道の世界マスターズ大会においてM8クラス(65～69歳、66kg以下)で3位入賞に輝いた。



サンパウロ大会で表彰台に立つ中島さん(左端)

中島さんは、9歳のときに姉の夫の影響で柔道を始めた。第二次世界大戦後のGHQによる武道禁止令が解除になる前年であった。そして、中学時代に熱心な指導者に巡り会いめきめきと腕を上げていった。その後、高校、社会人と順調に続けていたが、23歳のとき試合中に鎖骨を骨折し柔道を断念してしまった。完治後も仕事の関係で、そのまま柔道から離れてしまっていた。

そして、52歳のとき、忘れかけていた柔道への思いが再燃した。「わたしの父は53歳で他界したんで、その年齢を目前にして、父を越えるにはなにかと考えたとき、もう一度柔道をやって健康な体を作りた。そして、還暦は柔道着を着て迎えたい!と思っただんです。」と語ってくれた。

そんな中島さんに転機が訪れた。柔道を再開して10年ほど経った2001年「日本マスターズ柔道協会」が発足した。

それから、選手として世界マスターズ大会で活躍するとともに、協会の役員としても活動する日々が始まった。

現在、協会の会員は約1,500名。30歳以上が対象だが、働き盛りの人は忙しいこともあり、実際の活動は50歳以上の人が多い。

協会の役員、また選手としても多忙を極める中島さんであるが、地元での活動をおるそかにしているわけではない。現在、子どもたちを中心に、東大宮の道場で指導したり、宮代町の体

育館で指導をしたりしている。「子どもたちには技術的なことはあまりではなく、あいさつ、礼儀も教え、将来立派な社会人となるよう指導しています。それにしても白岡町には柔道をやる環境が整っていないですね。」と、心配する一面も見せた。

そんな中島さんは、高齢者の皆さんにこそ柔道をやってほしいという。「柔道は格闘技ではなく武道なので、子どもたちには子どもたちなりの、高齢者には高齢者なりの教え方があり、何歳になってもできるのです。こたつに座っていても柔道をしていても同じ一日です。柔道をしていると健康になり、医療費もかからなくなる。」と語る。

最後に、同世代の皆さんに「老いることはしょうがない。しかし、老いないように努力することがたいせつだと思えます。『生涯柔道であり生涯青春である』はマスターズ出場選手の合い言葉になっています。柔道は一例ですが、個々に生きがいを見つけて活力ある幸せな人生を送ることとはすばらしいことです。」と呼びかけた。



世界マスターズ大会の銅メダル